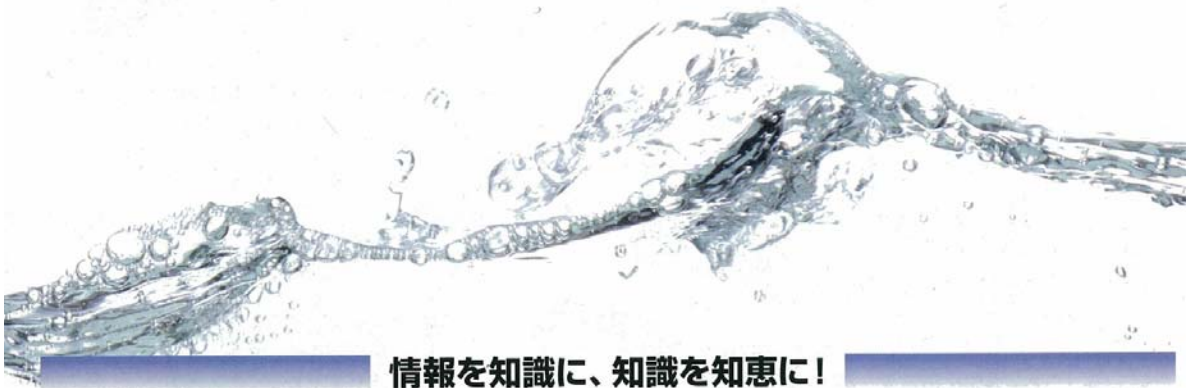


九州地方整備局管轄全ダム
河川情報を分かりやすく迅速に提供する
かわしるべ
「九州川標プロジェクト」の推進

活動組織・団体：国土交通省九州地方整備局 河川部

九州の川をもっと身近に、ふるさとをもっと安全にするために、
川の情報を見直す、新しいプロジェクトが始まります！



情報を知識に、知識を知恵に！

かわしるべ
九州川標プロジェクト

【概要】

平成 17 年 9 月台風 14 号による大淀川及び五ヶ瀬川流域洪水被害や平成 18 年 7 月梅雨前線による川内川流域洪水被害などを経験する中で、非常時の情報をいかに分かりやすく迅速に提供するか、提供した情報が住民の避難行動に活かされるためには、常日頃どうしておくべきか等の課題が浮き彫りとなった。

九州地方整備局では、これらの課題を解決するために、学識者やマスコミ、NPO等からなる「九州川標検討会」を平成19年10月に設置し、河川情報の共有のあり方について検討を開始した。平成21年3月6日に提言「川の安全・安心情報の共有に向けて」がとりまとめられ、この提言を受けて、河川情報の改善と共有化を図る取り組みを、「九州川標プロジェクト」として平成21年度から推進することとした。

背 景

近年頻繁している洪水被害の中で、特に、平成18年7月の川内川流域洪水被害においては、川内川のほぼ中央に位置する鶴田ダムにおいて、確保している洪水調節容量では不足する記録的な洪水となり、流入量とほぼ同量を放流する「計画規模を超える洪水時の操作」に移行した。洪水直後から「浸水被害はダム操作が原因である」といった鶴田ダムへの批判がダム下流域の被災者の方々などから寄せられた。

これらの洪水を経験する中で、非常時の情報をいかに分かりやすく迅速に提供するか、提供した情報が住民の避難行動に活かされるためには、常日頃どうしておくべきか等の課題が浮き彫りになった。また、ダムの操作について十分な理解が得られておらず、様々な誤解が生じていることもわかった。そのため、これらの課題を解決するために、河川情報の共有のあり方についての検討が必要であった。

【川内川流域 平成18年7月洪水についての新聞記事】

- ・南日本新聞 平成18年7月30日 掲載

創意・工夫した事項（全般）

平成18年7月の川内川流域の洪水等において明らかになった課題の改善策として、具体的に実践すべき取り組み8項目を選定し、これを「九州川標プロジェクト」として推進することとした。

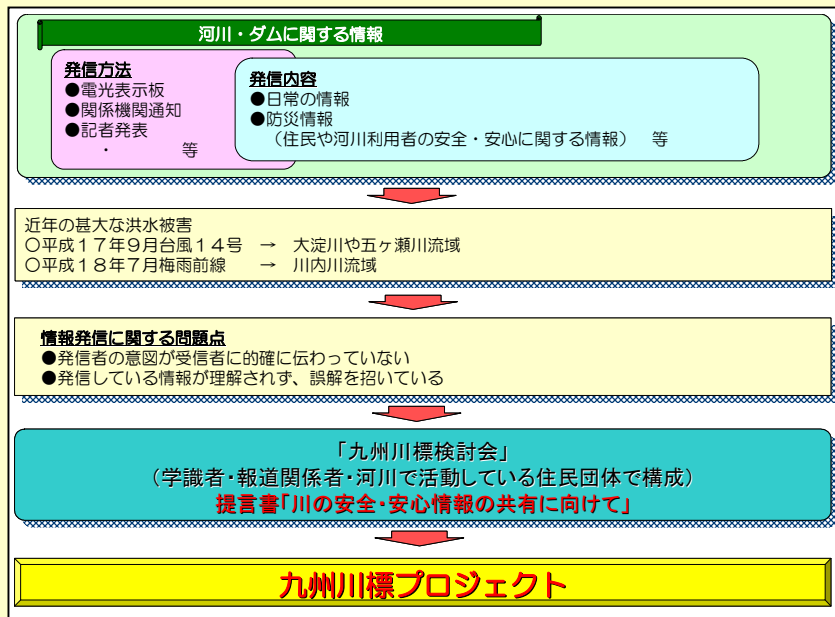


図-1 九州川標プロジェクトの経緯

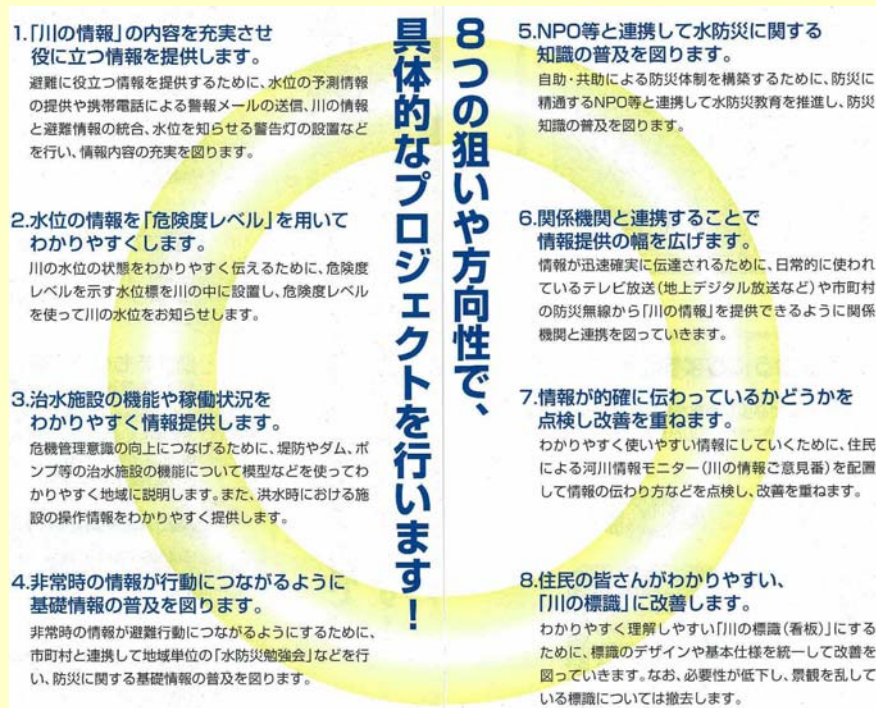


図-2 九州川標プロジェクト -8つの狙い-

創意・工夫した事項（1）

（1）川の情報の内容を充実させて、役に立つ情報を提供

住民の避難に役立つ情報を提供するために、**水位の予測情報の提供や携帯電話への警報メールの送信、水位を知らせる警告灯の設置等**を行うとともに、**河川情報と避難情報の統合や情報内容の充実**を図る。

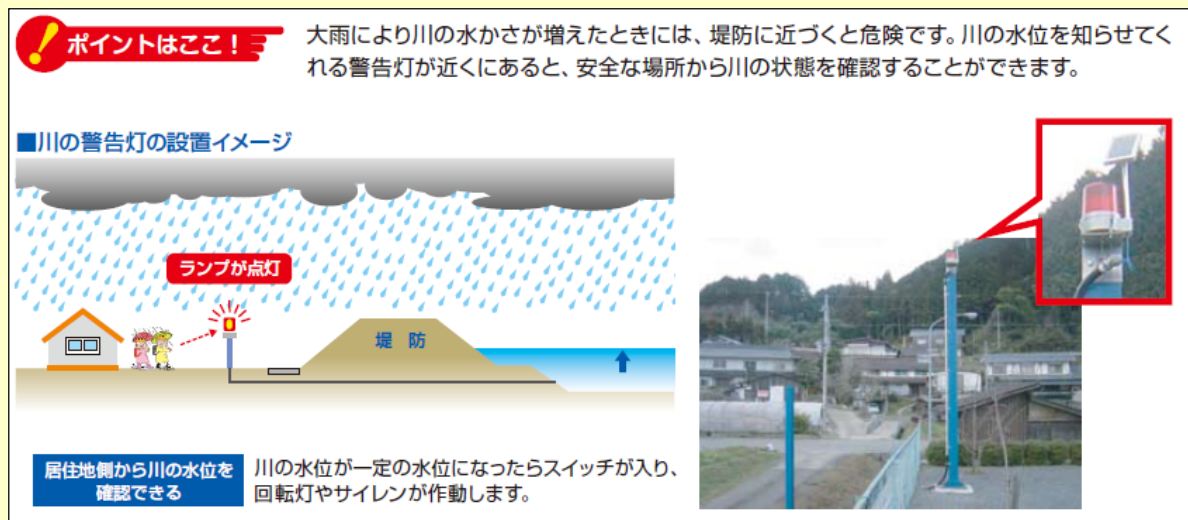


図-3 水位を知らせる警告灯のイメージ

創意・工夫した事項 (2)

(2) 「危険度レベル」を用いて、水位の情報を分かりやすく提供

河川の水位の状態を分かりやすく伝えるために、危険度レベルを示す水位標を河川内（橋脚・護岸など）に設置し、危険度レベルを用いて河川の水位情報を提供する。

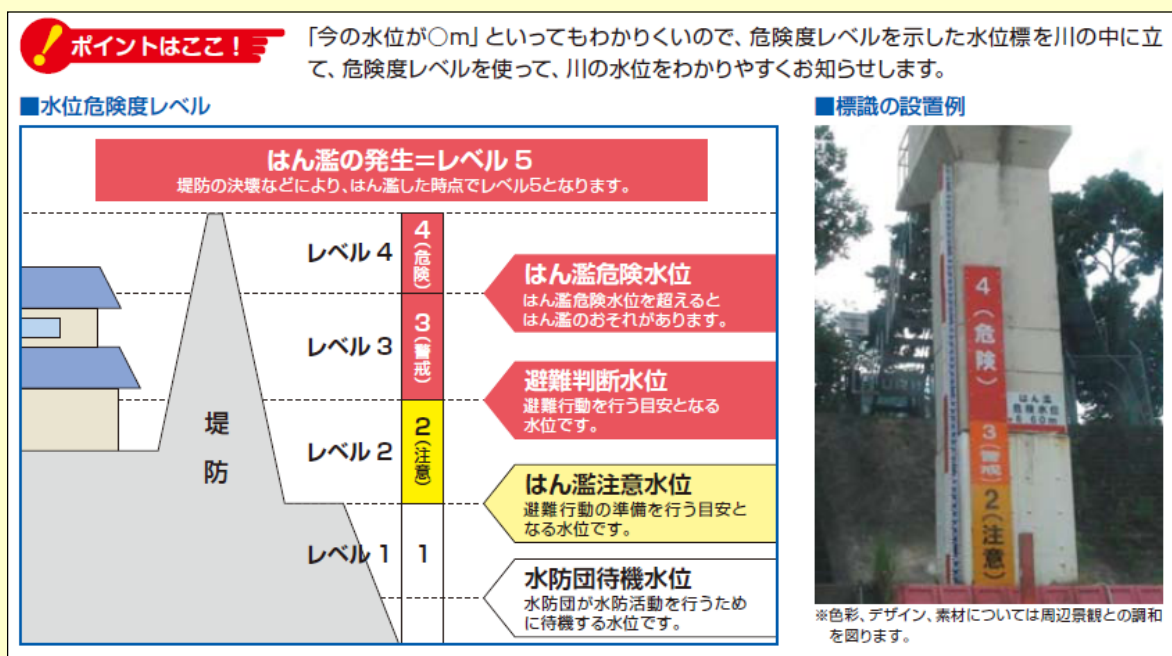


図-4 危険度レベルを示す水位標識の設置




創意・工夫した事項 (3)

(3) 治水施設の機能や稼働情報を分かりやすく提供

危機管理意識の向上につなげるために、堤防やダム、ポンプ場等の治水施設の機能とその限界について模型等を用いて分かりやすく地域に説明する。また、洪水時における施設の操作情報を分かりやすく提供する。

！ポイントはこちら！ 堤防やダム、ポンプ場などの治水施設は万能ではありません。模型などを用いて説明することで、これらの施設の動きをわかりやすく知ることができ、異常な雨が降ったときの対応など危機意識を身につけることができます。

ダムやポンプ場などのことがよくわかった！でも水害を起こさないようにするのにも限界があるから、日頃からの備えや避難が大切だ。




模型などを使ってわかりやすく説明し、ダムなどの役割や機能を知ってもらいます。

ダムなどの操作室を見てもらうことで、知識を深めてもらいます。

図-5 治水施設の機能を知ってもらうための取り組み

実施状況(今年度、解りやすく工夫したこと)

- 放流開始時間の情報を表示し、警報活動を充実させた
- 台風接近の注意体制中には、住民へ注意を促した。



文字をスクロール




図-6 電光掲示板による情報提供の工夫 (鶴田ダム)

創意・工夫した事項（4）

（4）非常時の情報が行動につながるように、基礎情報を普及

非常時の情報が避難行動につながるように、市町村と連携して地域単位の「水防災勉強会」等を実施し、水防災に関する基礎情報の普及を図る。



ポイントはこちら！

常日頃から防災勉強会を行い、住民の皆さんと国や市町村が、共通の情報を持っておくと、イザというときに、情報が避難行動に活かされ減災につながります。



過去の水害地図や浸水想定区域図などで、住んでいる場所の危険を確認します。



浸水したらどうなるか、実際に自分たちの「まち」を歩いて確かめます。



川の防災拠点施設などで、「川の情報」の見方や使い方をすることができます。

※浸水想定区域図や川の基礎情報は、川の防災拠点施設でいつでも確認することができます。

図-7 水防災勉強会等の実施状況

創意・工夫した事項 (5)

(5) NPO等と連携して、水防災に関する知識を普及

自助・共助による防災体制を構築するために、防災に精通するNPO等と連携して水防災教育を推進し、防災知識の普及を図る。

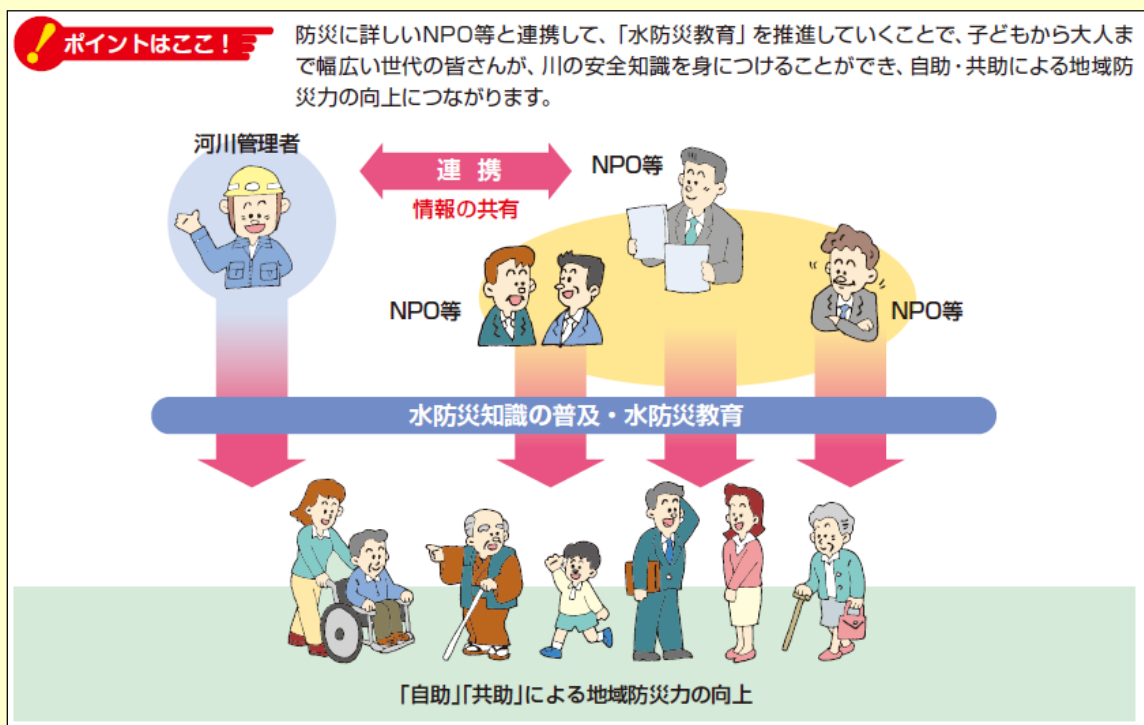


図-8 NPO等と連携した水防災教育推進のイメージ

創意・工夫した事項 (6)

(6) 関係機関と連携して、情報提供手段を拡充

情報が迅速確実に伝達されるために、**使い慣れているテレビ**（地上デジタル放送やテロップによる情報提供）や市町村が有する**防災無線**から**河川情報を提供**できるように関係機関と連携を図る。

！ポイントはこちら！ テレビ局の協力を得て、地上デジタル放送を通じて川の情報を提供できるようにします。自宅にいながら、自分が知りたいときに知りたい情報を知ることができます。テレビから緊急速報がだされることで、すばやく情報を知ることができます。

※この取り組みを進めるためには、テレビ局の協力を得て推進することになります。

■知りたいときに知ることができる

■素早く知ることができる

地上デジタル放送

テロップによる速報

図-9 テレビを通じた河川情報提供のイメージ

創意・工夫した事項 (7)

(7) 情報の伝わり方を点検して改善

わかりやすく使いやすい情報にするために、**住民による河川情報モニター**（川の情報ご意見番）を配置して**情報の伝わり方等**を点検し、改善を重ねる。

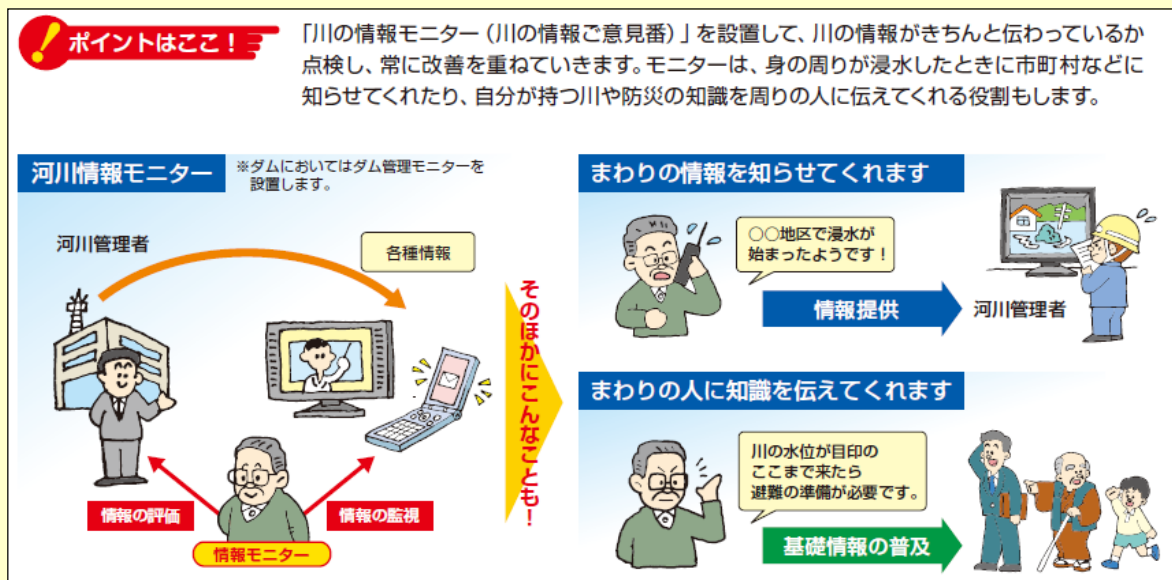


図-10 河川情報モニター（川の情報ご意見番）のイメージ

創意・工夫した事項 (8)

(8) わかりやすい「川の標識」へ改善

わかりやすく理解しやすい「川の標識（看板）」にするために、**標識のデザインや基本仕様を統一**して改善を図る。

！ポイントはこちら！ 川ごと、地域ごとにバラバラだった「川の標識（看板）」に共通の色や絵柄を使うことで、もっとわかりやすい標識になり、川の安全利用に役立ちます。

禁止行為を示す標識

注意喚起を示す標識

改善イメージ

**ここに入っては
いけません**
機械に巻き込まれる
おそれがあります

改善イメージ

**廃棄物を捨てては
いけません**
不法投棄は、法律もしくは
条例により罰せられます

改善イメージ

**サイレンが鳴ったら
川からあがろう**
サイレンはダムから水を出す
合図です川の水がらえます

改善イメージ

**サイレンが鳴ったら
川からあがろう**
サイレンは
ダムから水を出す合図です
川の水がらえます
場所によっては周りの
景観にあわせて木材な
ども使用します。

- ・禁止は赤色、注意喚起は黄色を使って色で分けます。
- ・わかりやすい言葉で伝えます。
- ・一目でわかるように、統一した図柄を入れます。
- ・周りの景観を乱さないように、材料やデザインに配慮します。

※九州大学大学院芸術工学研究院の協力を得てデザイン等を検討しています。

図-11 河川標識（看板類）の改善イメージ

創意・工夫により得られた効果

「九州川標プロジェクト」を推進していく上で、特にダムにおいては、図-12 のような事項に取り組んでいる。この中で模型等によりダム機能の説明を受けた方から以下のような意見が寄せられた。

- 洪水時の水の流れがわかり、ダムの効果が理解できた。
- ダムの機能そのもののイメージがつかめた。

ダムにおける取り組み

- ダム下流住民との意見交換
- 模型等によるわかりやすいダム機能の説明
- 情報表示板表示内容の見直し
- ダム用語の見直し
- 報道機関との勉強会
- 情報を「もっとわかりやすく使いやすくする」ための取り組み

図-12 九州川標プロジェクト（ダムにおける取り組み）



ダム洪水調節の仕組みについて住民の理解が促進されるよう、模型を活用して説明を実施。

図-13 模型等によるわかりやすいダム機能の説明

今後の展開

- ① 平成 21 年 6 月から開催している九州地整の各事務所職員で構成する「川標プロジェクトリーダー会議」を今後も継続的に開催し、各事務所の取り組み方針・状況等を相互に確認していく。
- ② 学識者やマスコミ、NPO等からなるフォローアップ検討会（仮称）を設置して、取り組み結果を評価し、逐次改善を重ねて効果的な取り組みとなるように努めていく。
- ③ 本プロジェクトの推進にあたっては、県や市町村等の関係機関と緊密な連携を図る。